

評価論における 発展的評価（DE）の位置づけ

源 由理子

明治大学プログラム評価研究所（IPE）
明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科



1. 「伝統的評価」との比較

Comparison with “Traditional Evaluation”

■ 確立された「モデル」を前提としない

- ロジックモデル、セオリーオブチェンジへの批判的検討
- DEの焦点はモデル内の改善 (*improvement*)ではなく、新しい展開 (*development*)

■ 「形成的評価→総括的評価」ではなく「発展的評価」

- 形成的 (*formative*)評価は総括的 (*summative*)評価を行うための手段
- 伝統的評価は変化し続ける現場のニーズに必ずしも対応できない

■ 第3のアカウントビリティ

- 「学習・発展・適応」のアカウントビリティ
- 現場で起きていることに対するアカウントビリティ

2. 「実用重視評価」の流れ

As an Extension of *Utilization-focused Evaluation*

■ 評価は「役に立つべき」である

- 1st stage: 科学的に証明できる評価知識の構築 (*knowledge construction*)
- 2nd stage: 評価知識の活用 (*use*)
- 3rd stage: 統合された評価 (*comprehensive, tailored, theory-driven evaluation*)

■ ステークホルダーと評価専門家の関係性再考

- DEは広義の参加型評価 (カズンズら)
- 評価プロセスの活用 (*process use*)
- イノベーションをもたらそうとしている人々を、評価をとおして支援する

3. 「評価の厳格さ」

Evaluation Rigor

■ DEは「評価の手法」を示すものではない

- 状況に合わせて既存のあらゆる評価技法を活用する
 - e.g. 介入の仮説、ロジック、評価設問、評価デザイン、データ収集・分析方法、価値・比較基準等
- データに基づくのでなければ、「評価」とはいえない

■ 「厳格な」評価的思考：evaluative thinking

- 調査手法の厳格さではない
- ステークホルダー間で共有された価値基準や指針とエビデンスに基づく評価

若干の考察：なぜDEなのか

A Thought on Why “DE”?

■ アメリカにおける「評価専門家」（外部、内部）の役割再考

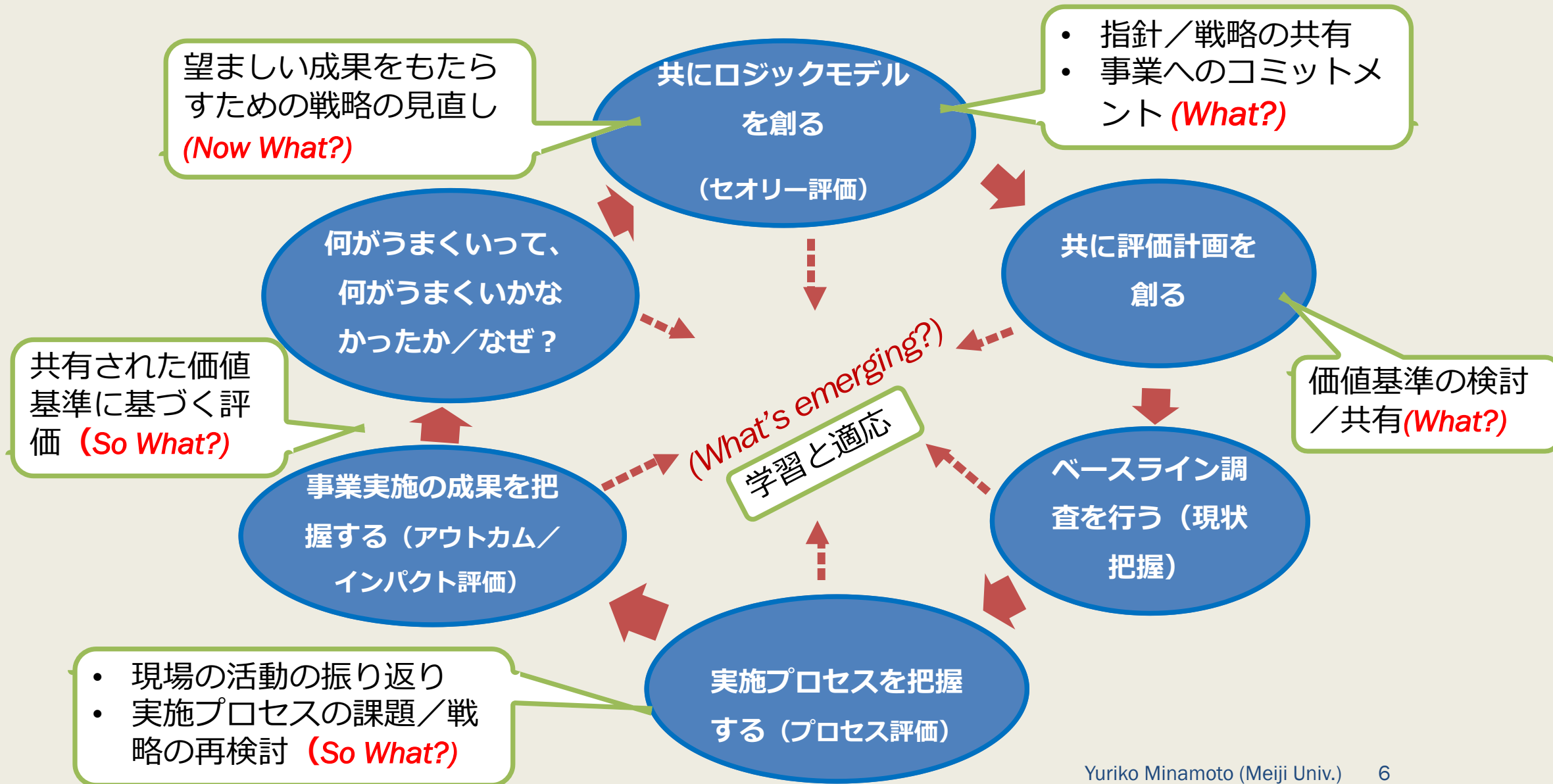
- 確立された事業を前提とした効果検証という「静的」な行為に対する異議
- 「統制」機能ではなく、「エンパワメント機能」へのシフト
- 評価者の「独立性」を前提とした「動的」な動きへの評価のあり方
- 日本は？ 外部評価専門家が少ないという現状

■ 評価とマネジメントの接近

- *Wicked problems* への対応
- 戦略的なマネジメント、創発的思考 (*emergent thinking*)

「DE的」実践：評価により共創、イノベーションを支援する

Support Co-creation & Innovation through Evaluation



最後に、*Developmental Evaluation:* このような呼び方ができます

- Real-time evaluation
- Emergent evaluation
- Adaptive evaluation

by Patton

ご清聴ありがとうございました

